

タヒティの老人はどのように語ったのか

—『ブーガンヴィル航海記補遺』の手法—

末 松 壽

I. 『補遺』の制作と構成

ブーガンヴィルの『世界周航記』

ブーガンヴィル (1729–1811) はフランスの軍人にして航海者。カナダにおける対イギリスの戦争にモンカルム将軍のもとで参加したあと、1766年11月から1769年3月にかけて世界周航を果たす。港湾都市ナントを発って、大西洋をわたり、マゼラン海峡をぬけて太平洋に出、タヒティに到り (1768年4月)、次いでポリネシアの海をこえて希望峰に達し、アフリカの西側を北にのぼって帰国、という航路であった。これはフランス王からの使命をおびた公式の企てとして最初の偉業であり、著書を国王に献呈するブーガンヴィルが真先に思い出させる事実である¹⁾。ちなみにラ・ペルーズ探検隊の失踪も、バウンティ号での反乱もその20年後におこっている。もちろんソロモン諸島最大の島の名とかブーゲンヴィリアという花とかは航海者にちなんだ名称である。

航海の後、1771年初めに彼は『世界周航記』を出版する。10日ばかりの滞在となったタヒティとその住民の生活、とりわけ性風俗に関する記述は報告の中でも圧巻であった。しかしその前強力なインパクトとなったのは、彼が現地からアオトゥルーなる男をパリに連れてきたことであった。ルイ十五世をふくむ王侯貴族たちはこれをむかえているし、ポリネシア人の姿はオペラ座や王立動物園 (Jardin Royal) でも見られた。彼と問答をかわす社交人もいた。ペレール (J. R. Péreire. 1736年スペイン生まれ) は、これをインフォーマントとしてタヒティ語について調査している。そしてついにアオトゥルーにパリの風俗を吟味させる趣向の作品が現れた²⁾。「善良な野性児」(bon sauvage) のもう一つのタイプとして、インディヤンに続いてタヒティ人が出現したのである。

もっとも航海者自身は、世間のとりわけ物見高い文人たちの喧騒を冷たく嘲笑っていた。「自分は誰それを引用したり反論したりしないし、何らかの仮説を立てたり攻撃したりするつもりはさらに無い」という彼は、そのいわゆる「今日あまりにもありふれた、しかし真の哲学とはあまりにも相容れない体系

精神」を次のように論難している。

私は旅行者であり船乗りである。すなわちあの不精で傲慢な部類の作家たちの目には嘘つきで愚か者にすぎない。彼らはその書齋の暗がり、世界とその住人たちについて際限なく哲学し、自然界を有無をいわず自分たちの空想に服従させる。奇妙な振舞いである。自分では何も観察せず、まさしく彼らのいわゆる見る力も考える力もないこれらの旅行者たちからもっぱら借りてきた観察にもとづいて文章を書きまくり、独断的な物言いをするのである³⁾。

機先を制する否定を前にして、それでもペンをとる文人哲学者にとって、一体いかなる答えがあり得たであろうか。否、私の示すのは空想ではない。事実でないことはたしかだが、構うことはない。それは真実なのだ、と観念的な口実をたてるか。もしくは、否、これは哲学などではない。コントだよ、ファンテジーだよ、と無責任の隠れ蓑をまとうか。幸いなことに作品は曖昧であった。あるいはもっと簡単に、知らぬふりをきめこむか。ともあれ、航海記の読みは書く意欲を刺激する。

『ブーガンヴィル航海記補遺』の構成

ディドロの作品⁴⁾はそのタイトルの通り、ブーガンヴィルの『周航記』に起源をもつ。作品の生成過程には様々の面白い問題がある。複数の写本の存在、そしてその制作にディドロも協力したガリアニ神父の作品との関係などであるが、ここでは筆者にとってことに重要と思われる二三の点にかぎって指摘しておこう。

まず、ディドロはこれを同時期の他の二つの作品とともにコント三部作として構想している。ごく簡単にいえばコントとは、(ヴォルテールの『カンディッド』や『ランジェニュ』を思い出そう)たとえ真面目な主題をあつかうにしても、その扱いは軽く、おかしく、あるいは好奇心を刺激する物語、場合によっては猥雑さも拒まず、少なくとも笑いを引き起こすようなそれほど長くない物語作品、と理解することができよう。民話 (contes populaires) に対しては創作であり (かつディドロの場合には不可思議とか魔法の要素はまったくない)、今日いわゆる笑い話 (histoires drôles) に対してはより長くかつ物語ももっと念入りに構築されるジャンルである。(フロバールではコントの意味や有り方

は異なってくる)。

三部作の他の二つとは、一つは『これはコントではない』(*Ceci n'est pas un conte*)と題された実話風のコントで、グリムの発行する『文芸通信』に1773年4月に発表された。もう一つは『カルリエール夫人』(コント)(*Madame de La Carlière : Conte*)で、同じ定期刊行物に1773年5月に掲載されている。もちろん力点の置きかたは異なるが、物語がフランスで展開するこれらの作品は、いずれも恋愛や結婚における様々の困難、したがって幸せなまま永続することのない情熱の問題を核として、それに付帯する一連のテーマ、金銭、自己犠牲、忠実や不忠実、片思い(特に第一作)、善悪、そして世間の評価、司祭(特に第二作)などを扱っている。そして片やこれらの不幸とその原因を、二つのコントの登場人物を例にあげさえて論じ、片やまったく異なる「幸せな」男女関係の夢を対置するのが『プーガンヴィル航海記補遺』である。

ところで、以上の観察はすでに作品の難しさを予想させる。というのはそこに、主題の重さとその扱い方の軽さとの間のズレからくるある種の曖昧さ、難解さを予想することができるからである。これは、異国で展開する風変わりや洒落たお遊び、いささか勿体ぶったいわゆる艶笑滑稽譚なのか、放蕩のプロバガンダなのか、それとも深遠な哲学的アレゴリーなのか。

第二に、『補遺』は、二つのコントに続いて、1773年9月から翌年4月にかけて4回にわたって『文芸通信』上で発表されるのだが、その前、ディドロはプーガンヴィルの紀行について同じ刊行物のために「世界周航」という標題の書評⁵⁾を書いていた。グリムが結局は公刊しないこの一文は『補遺』制作の一段階となり、とりわけ作品第一部の資料となる。「評価」と題されたこの部分は、じっさい上記書評を二人のコメンテーターであるAとBによる対談の形に書き直したものに他ならない。なおディドロは、『文芸通信』での発表の後も、テキストの増補を続けていく。いわゆる初版もそれらの推敲を全て含んではいなかった、という。

第三に、作品の制作についても一言注釈すれば、文学作品は現実生活での葛藤から生まれるという考え方に対して、そうではなくそれは他の作品から発して、それとの関わりから、つまりテキスト間関係性(intertextualité)において生まれるという主張が、たとえばジュリア・クリステヴァなどによって唱えられたのだが⁶⁾、『補遺』こそはそういう主張を典型的に証明する作品の一つである。これはディドロのプーガンヴィルとの出会いから生まれた⁷⁾。もちろんそれは、制作の直接的な契機となるのが『世界周航記』との出会いであった

という意味であって、著者が生活において歴史との関わりにおいてある種の事柄に関心をもっていたことを妨げるものではない。それゆえにこそ、三部作の構想は浮かんだのであろうし、そのうちある特定の契機に触発されて、第三作は前二作とは異なる形の、異なる物語となって編み出されたのであろう。テキストは本の形では著者の死後1796年に出版された⁸¹⁾。

正確には『ブーガンヴィルの『航海記』への補遺、もしくは道徳的な観念を、それを含まないある種の身体的な行為に結びつける不都合に関するAとBとの対話』と題された、全集版で68頁、ガルニエ版では62頁の作品で、五つの部分から成る。すなわち、

- I. ブーガンヴィルの『航海記』の評価 (O.C., pp. 577—588)
- II. 老人の別れのことは (O.C., pp. 589—598)
- III. 従船司祭とオールとの対話 (O.C., pp. 599—617)
- IV. 司祭とタヒティの住人との対話の続き (O.C., pp. 617—627)
- V. AとBとの対話の続き (O.C., pp. 627—644)

二層の言説が共存している。まずごく大まかに言えば、AとBとの対話からなるIとVとがII、III、IVをかこんでいる。後者はほぼ全体としてブーガンヴィルの一行とされるフランス人たちのタヒティ到着から彼らの出発までの期間に位置する物語で、とりわけそこで展開される虚構の演説と対話である。ところでAとBというのは、読者と批評家といった感じの一種の登場人物であって、恐らくフランスにいて、ブーガンヴィルの『航海記』およびこれらフィクションの部分 (II、III、IV) を読みつつ批評し、あるいはBを答え手としたいわばインタビューの形で一種の書評めいた対談を行っている。読まれつつあるテキスト群とそれについて語るメタテキストである。この点でも、三部作は互いに共通性をもっている。前二作にも説話のレヴェルのみならず、解説者 (Bに似ている) と聞く人もしくは読者 (Aを思わせる) ——両者ともに絶えず言葉をはさむ——の位置するレヴェルが識別されるのである。特に第二作と『補遺』とは明示的に連結されている。問題の二人はそれぞれの作品の初めと終わりまで気象に関する考察を披露するし、そのうえ『補遺』のAとBは第二作の対話者であることを自ら認めてさえいるのである (I, p. 579)。

否、少なくともBは作品に対して解説者より以上の責任をもつとおもわれる。IIにおいては、彼が老人の演説をAによませるのであり、その読みに対応する

のがまさに演説テキストである。その後演説について二人は批評しあい、次いでBはブーガンヴィルの航海での一挿話（男装して船に乗りこんでいた女性のこと）を紹介している。誤読する危険を冒してもっと微妙でもっと大胆な指摘をおこなうべきであろう。というのは、Ⅲにもまた冒頭に単純過去時制による導入のテキストがあるのだが、そしてⅢの終わりの介入では、おなじくBが、司祭とオールとの対話にちなんで、司祭が書いた上で削除したというノートを紹介する（Ⅲ, p. 613; Ⅳ, p. 633）のみならず、ニュー・イングランドで起こったという（実はベンジャミン・フランクリンのでっちあげた）かなり長い物語⁹⁾を語っているのである。口述での語りあるいは朗読という（架空の）行為によるテキストの出現は、実は作品がむしろその時作られつつあると解釈すべきではないだろうか。Aはテキストをもたない。Bがこれを提示する。先に二人は批評家とその友達ないしいわばジャーナリストの姿を思わせると述べたのだが、そしてB自身は（そしてAも）、彼がAに紹介し読ませる二つの部分、つまり作品の第二章および第三章のタヒティで展開する部分を、ブーガンヴィルがその書物から削除した部分だと述べている（Ⅱ, p. 596, cf. Ⅲ, p. 613）——もちろん韜晦である——が、Bはむしろ作られつつある作品の作者を代理しているのではないか。パラドクスであるが、「作者」が作品内に、虚構性をまとう作品内存在として登場している一種の入れ子構造を考えるべきではないだろうか。司祭の「ノート」類も含むこれら全ての「削除された」テキストを所持しているのはひとりBだけなのである。

いずれにせよ、AとBの二人は、書・読の行われる現実世界に一段と近いレヴェルに住む虚構の人物である。それに対して老人、司祭、オールらはフィクションの中での更なるフィクションの住人である。この作品の面白さは、少なくとも部分的には、構成に見られるこの二重構造とか、テキストが示唆する言説の生成の機構とか、あるいは対話というディドロの好んで用いた形式（言説ジャンル）の純然たる物語との絡み合いの事実にあるのかもしれない。つまり先にあげた二つのコントと同じように、作品は小説を主題とした小説、一種の「反小説」という面をもつということである。

ところで、コント三部作の一つとして構想されたにもかかわらず、全集版の序文が指摘しているように¹⁰⁾、最近にいたるまで大部分の編集者はこれを他の二つと切り離して出版してきた。我々の印象では、それはテキストの分量の多さや構成の複雑さ——より大きな「重要性」——もあるが、とりわけ人々が内容からして『補遺』を「哲学」ないし「思想」作品と見なしたからであると思

われる¹¹⁾。作品の解釈はテキストとの対面から始まるのではなく、それはすでにテキストの出版を条件づけているのである。先に筆者は作品における主題とその扱い方の間の不均衡に言及したのだが、そのことを『我々と他人』の著者も指摘せずにはおかない。トドロフは書いている。

エグゼティックな討論、いささかふざけた対話の外見のもとに、彼は重大な問題に取りくんでいる。すなわち文明の複数性をまえにした倫理の基礎の問題、したがって結局、道徳的規範の問題である¹²⁾。

だがその後で著者は、一挙に作品の（あるいはディドロの？登場人物の？作品には複数の発言者が存在していて、それは決定し難い）¹³⁾ 倫理・道徳思想の検討に入ってしまう。形式に敏感なことがよく知られているトドロフにしてそうなのである。無論「フランスにおける人の多様性に関する考察」という思想史の主題を扱うのであるから、それは避け得ないことであっただろうが。学者たちはじっさい、作品を倫理や道徳、人類学や人類史、あるいは宗教批判、文明批評、要するにもっぱらイデオロギーの観点から考察しがちであった¹⁴⁾。他のテキストとの関連が話題になるとすれば、それは前記コントではなく、*Pensées détachées* (N. a. fr. 24939) とカレイナル神父の『両インド史』、『百科全書』のいくつかの項目、ドン・デシャン、ルソー、エルヴェシウスやサドなどであった。

しかし我々はここで、あえて一つの「文学的な」読みを開きたいとおもう。ロシア・フォルマリストたちのひそみに倣って、作品テキストがどのように作られているかを問うのである。それは微視的な研究となることをお断りしておく。小さな一部分をとりあげ、これを見本として手法を分析するのである。もし幸いにして我々が作品テキストの一面を確かに示し得るとするならば、後は推して知るべしということになるだろう。

II. 老人の別れのことば

1. テキスト

BはAに老人の別れのことばを読むようにすすめる。

さあ読んでください。(…)島の首長の一人がわが旅行者たちにおこなった別れのことばに直行してください。これらの人々の雄弁が大体のところどんなものかわかるでしょう。(O. C., t. XII, p. 588)

これに続いて第二部がはじまり、まず状況の説明がくる。すなわち、

一人の老人が語る¹⁵⁾。それは大家族の家長であった。ヨーロッパ人の到来に際して、老人は驚きも恐れも好奇心もみせることはなく、ただ蔑みの眼差しを彼らになげかけたただけだった。ヨーロッパ人たちが彼にちかよると、彼は背をむけて自分の小屋にたち去った。沈黙と気づかわしげな様子はその思いを十分すぎるほどあらわしていた。彼は自分の国のうるわしい日々がかけるのをひそかに嘆いていたのである。ブーガンヴィルが島を発つ日、住人たちは群れをなして岸辺にはせ参じ、ブーガンヴィルの衣服にとりすがり、また仲間の隊員たちを腕に抱いて涙にくれるのだった。そのとき、老人はきびしい表情ですすみで、次のように言った。(II, O. C., p. 589)

老人は、ブーガンヴィルの一行に別れの言葉をかける前に、まずタヒティ人たちに向かって、西欧による政治的・宗教的支配の危険を警告する。つづく端的な意味での「別れのことば」においては、ヨーロッパ人の露骨な支配の意図に対する抗議を別にすれば、彼らのもたらした隠匿すべき性観念——悔いや恐れや恥辱とむすびついた(19世紀以後の語を用いれば)「エロティスム」——の有り方、および性病、そして彼らの犯した殺人の糾弾が演説の主な論点である。

同胞にあてた老人の言葉の原文とその拙訳は次のとおり。

Pleurez, malheureux Otaïtiens, pleurez, mais que ce soit de l'arrivée et non du départ de ces hommes ambitieux et méchants. Un jour vous les connaîtrez mieux. Un jour ils reviendront le morceau de bois que vous voyez attaché à la ceinture de celui-ci dans une main, et le fer qui pend au côté 5 de celui-là dans l'autre, vous enchaîner, vous égorger ou vous assujettir à leurs extravagances et à leurs vices. Un jour vous servirez sous eux, aussi corrompus, aussi vils, aussi malheureux qu'eux. Mais je me console, je touche à la fin de ma carrière, et la calamité que je vous annonce, je ne

la verrai point. O Otaïtiens, ô mes amis, vous auriez un moyen d'échapper
10 à un funeste avenir, mais j'aimerais mieux mourir que de vous en donner le
conseil. Qu'ils s'éloignent et qu'ils vivent. (O. C., t. XII, pp. 589—590)

泣け、不仕合わせなオタイティ人たちよ。泣け。だがそれはこの野望をもつ邪な男
たちが出てゆくからではなく、やってきたからだ。いつの日かお前たちには奴らのこと
がもっとよく分かるだろう。いつの日か奴らはもどってくる。片手には木切れをもち—
—ほらその男が腰帯にぶら下げている木切れだ——、もう一方の手には、あの男が脇に
吊るした鉄をもつてもどってくる。お前たちを鎖につなぎ、喉笛をかき切り、もしくは
自分らの途方もない振舞いや悪徳に従わせるために。いつの日か、お前たちは奴らに仕
えることになる。奴らと同じように腐りはて、さもなく、惨めになって。だがわしのこ
とはいい。わしは生涯の終わりに差しかかっている、お前たちに予告している災いを見
なくて済むからだ。おおオタイティ人たちよ、我が友達よ。お前たちには不吉な将来を
まぬがれる手立てが一つあるのだが、それを勧めるくらいなら、わしはいつそ死んだ方
がましだ。奴らは島を離れるがよい、生きてゆくがよい。

2. 演説の評価——「野性の」雄弁か——

さて、その後、すでに述べたように、ブーガンヴィルとその一行に宛てた別
れの言葉がつづく。テキストでは5—6頁にわたっている。ところで、この老
人の演説に関して、マイスター（もしくはメステール）(Jacob Heinrich Meister,
1744—1825) が面白い評価を残しているので、これを紹介する。先にみたBの
「これらの人々の雄弁がどんなものかわかるでしょう」という招きに応えるコ
メントである。

『ブーガンヴィル航海記補遺』におけるオタイティ人首長による演説は、
とディドロの心酔者という、あらゆる言語で存在する野性の雄弁(éloquence
sauvage)の最も見事な小品の一つである¹⁰⁾。

全集版の編集者は、マイスターのこの評価を引用したあと、「しかしこれが確
かに野性の雄弁であるかどうかは正当に問うことができる」と注記している。

実はディドロ自身、いわばいかにもそれらしい贋物 (faux) つまり似せ物、
一種の模作を作っていることを当然のことながら弁えていた。(マイスターの

ように) 騙される者はそれでよいとして、(ディドロ全集の編集者のように) 模倣であることに感づく者もいるのではないか。それゆえ彼は、表層の対話者であるAとBを通じて、前もってある種の正当化を行っていたのである。実際、老人の発言がおわった時、「どう思いますか」と感想をたずねるBに、Aはこう答える。

この演説は激越 (véhément) だと思います。けれども、何かしら険しい (abrupt) 野性的な (sauvage) ものをとおして、私にはヨーロッパ的な考え方とか言い回しが見出せるように思えるのです。(II, O. C., p. 596)

これに対してBは、演説はタヒティ語からエスパニヤ語に、次いでエスパニヤ語からフランス語に翻訳されたというもっともらしい事情をあげる。口述から文書への変換、次いでなされた重訳によって、文章は次第に西欧的な表現法や思考方法の鑄型にはめられていった、というのである。

この演説については、これまでに見た二三の反応の外に、ディドロがよく知っていた古代ローマの歴史家たち(タキトゥス、クイントゥス・クルティウス)のテーマの一つであったという指摘とか、逆にマリアナ諸島民の演説との比較、あるいはディドロ自身の手になる『両インド史』中のホッテントット族に関する件——両者のテキスト間関係は余りにも明白である——との比較なども提案されている¹⁷⁾。更にベンレカッサはこう断定してはばからない。

彼〔オルー〕の論証術が、老人の雄弁と同じくタヒティのものでないことは余りにも明らかである。しかしAが指摘するように老人の演説に「ヨーロッパ的な思想とか言い回し」を見るとしても、そしてオルーの弁論が彼にふたたび「少々ヨーロッパ風に」形成されているように見えるとしても、同じような指摘が必要になる理由は異なる。一方において問題になるのはレトリックであるが、他方では論証とその内容が問題になるからである¹⁸⁾。

オルーの論証 (dialectique) と同様に老人のレトリックもまたヨーロッパ的であるというのである。しかしタヒティ的でないことは「余りにも明らか」と断定するのは、もちろんタヒティの論証術や修辞学に精通した人にとってなら別だが、それほど簡単なことであろうか。むしろ自明ではないからこそ、ほぼ対蹠点にある評価が可能だったのではないだろうか。というのも、マイスターが

「野性の雄弁」という時、そこには西欧的ではないという意味が含意されているからである。いずれにせよ、作品における論証のみならずその修辞もまた、何故に「西洋的」であるといえるのかが問われて然るべきではないだろうか。

それゆえ筆者は、作品のイデオロギーに劣らず作られた物 (ouvrage) としたの側面、つまり技術 (= 芸術) の側面に注目し、先に復元した10行余りのテキストについて、Aのいう「ヨーロッパ的な考え方や言い回し」を具体的に検証してみたいと思う。かなり技術的な文体論を試みることになる。

ところでしかし、いわゆる「ヨーロッパ的なもの」をどこに何に定めたらよいのか。筆者は、十八世紀を代表する文法学者の一人で、ディドロとダランベールが彼らの膨大な仕事への参加を依頼した人物の手になる文献を主な比較の対象として選ぶことにしたい。すなわちデュマルセ (César Chesneau du Marsais, 1676-1756) の起草した『百科全書』の項目「フィギュール」¹⁹⁾ である。ディドロを雄弁家にすぎないなどと主張するつもりはない。けれども文章をものする以上、書き手が文法や修辞の支配に服さざるをえないことは事実である。それは作品テキストのテキスト性を規定する。そしてこの間いそのものは、先に見たように作者自身がBを通じて示唆していることも忘れまい。その上、我々が前にしているのは、かつてレトリックの誘惑に服していたことを自ら認めている哲学者なのである。彼はこう告白している。

ある時期私はセネカのことをこんな風に考えていた。その頃の私には良く行くよりはうまく言うことの方が、品行方正であるよりは文体をもつことの方が、知恵の教えによりはクインティリアヌスの教訓にしたがう方が、もっと肝要だと思われていた²⁰⁾。

これとて文体の分析へといざなう類の文章であるが、今は立ち止まるわけにはいかない。ディドロ/デュマルセの交差読解を試みることにしよう。

3. タヒティ人への言葉における修辞

(1) 提喩、もしくは鉄に関する考証

先ほどの翻訳文で、何を意味するのか理解困難な語句があったのではないだろうか。まずそれを取り上げる。無論「木切れ」と「鉄」である。

« ... *le morceau de bois* que vous voyez attaché à la ceinture de celui-ci dans une main, et *le fer* qui pend au côté de celui-là dans l'autre » (1.3-5)

前記「書評」の対応する件では、評者はブーガンヴィルを頓呼しつつ「十字架」(crucifix)と「短剣」(poignard)を指呼している²¹⁾。「語の固有の意味におこる変化の故に」(VPG., 618) 転義 (trope) と呼ばれる現象の一つで、ある物を用いるのに、その材料の名前によって表現する手法である。ただしデュマルセは上記記事において、様々の転義を必ずしも説明せず名称をあげるに止めているので、ここでは、それより前1730年に彼が公刊していた『転義論』を参照しよう。そこで著者は、提喩 (synecdoque) の種類の一つを次のように説明している。

... しばしば材料 (matière) の名を用いて、それによって作られている物 (la chose) を示すことがある。(…) ふつう硬貨、おかねの代わりに de l'argent [文字通りには銀] と言われる。鉄 (le fer) は剣 (épée) として理解される。たとえば「鉄 (剣) の下にほろぶ」。ウェルギリウスはこの語を鋤の刃を用いるために用いた²²⁾。

西洋の言語意識にとって、ある種の文脈において鉄が剣や短剣を意味するのは、実は常套的な比喩に他ならないのである。他方の「木切れ」は (ロザリオにつけた) 十字架を意味する。もちろんいずれもある時期からヨーロッパの伝統に根ざした比喩となっている。老人は、西欧が軍事力と宗教とをもってタヒティを支配しに来ると予言しているのである。

この文彩についてはしかし意味だけの確定では十分ではない。いわば語用論的な事情を調べなければなるまい。長い脱線に入ることになる。いくつかの前提条件がある。まずタヒティには文芸の歴史はあるにしても西欧のそれとは違った歴史であったらうし、修辞学とくにその文彩に関する議論は、あったとしても少なくとも西欧においてと同じ具合には発達していなかったと想定することができる。つまり提喩などというものの少なくとも理論的な知識が老人にあったと考えることはできまいというのが一つ。

そして何より、十字架も剣も知られていなかったというのが一つ。キリスト像については説明するまでもない。後者については、もし著者がブーガンヴィルを踏まえて物語を作っているという仮定に立てば、以下のように推論することができるだろう。『世界周航記』の証言によれば、伝統的に「金属というも

のを知らない」²³⁾ 島民は鉄のことを、ヨーロッパから最初に渡来したウォーリスらを通じて(したがって8ヵ月前に)知ったばかりであった。著者は「iron」に由来するらしい島民の用いていた「aouri」なる語を紹介している(pp. 270—271)。要するに鉄のことは知っているものの、剣もしたがってそれを名指す語も存在しなかった、ということになる。それゆえ老人が西洋人にとっては提喩に他ならぬ比喩表現を用いるとしたら、それは自らそれと知らずに、しかも他に方法がないからなのである。彼は、欠如を代補する限りにおいて濫喩(catachrèse)のプロセスに倣うこの二つの提喩をいわば「本能的に」発明しているのである。異化効果はつよい。ここにはまさに野性の比喩、起源的提喩が出現しているというべきではないだろうか²⁴⁾。

もちろん、西欧修辞学の側からの推測を遅くすれば、兵士つまり軍隊が存在する社会——なぜならオルーはこう言うのだった。「我々は彼〔子供〕のうちに農夫、漁夫、猟師、兵士(soldat)、夫、父親を見ているのです」²⁵⁾——に、仮に剣(フランス語の「épée」の定義にはその材料としての鋼が必須の要因であるかと思われる)に対応する木材、竹、石などを材料とする武器、たとえば木刀や竹刀の類があったとすれば、老人はそれを名指す語をもってフランス人の剣を隠喩的に指示することもできたであろう。しかしそれはブーガンヴィルの示唆する方向ではなかった。彼はタヒティ人の武器・道具として木製の槍とか石の刃をもつ手斧の存在を指摘しているにすぎず、刀剣の類への言及はまったく無いのである。

同じ仮設にもとづいて更に推論をつづけるならば、鉄に関しては付帯的なお二つの問題が現れる。まず老人が「剣」なる語を知らないが故に鉄と言わざるを得なかったとすれば、「鎖」についてはどうなのであるか。鉄の無い社会に鎖はあり得ない。そういう国の者が「奴らはもどってくる。お前たちを鎖につなぐ(vous enchaîner) ために」と言表することはできるのだろうか。作者は、ふたたび「野性の」(?), いやむしろフランス的なもう一つの提喩に訴えて、「vous mettre aux fers」(鉄につける)とか「vous attacher avec des fers」(鉄でしばる)とか言わせるべきではなかっただろうか。もちろんそれでは同一語を反復したり、韻律をくずすことにはなるが。

しかし、老人にとってこの新たな提喩を発明する必要は多分なかったと考えられる。というのもブーガンヴィルは、重大な規律違反をおかした隊員を鎖に繋いで見せることもあったのである。一人の住人が銃で殺された最初の事件につづき、3人の島民が銃剣で殺傷された二度目の事件のあと、隊長は「この大

罪の下手人であるとの嫌疑をうけた4人の兵士を首長の面前で鉄につけさせ」(p. 239, 強調筆者)ている。さらに、島における刑罰の在り方を語る文脈においても、同じ事件を思い出しながら彼は、「我が部下の誰かが鉄につけられるのを見るとき、彼らは著しい苦痛を見せるのだった」(p. 255)と述べている。要するに島民は、西欧における鎖(従って鉄)の存在とその用途の一つを目の当たりにしたという事実があるのである。

以上は、ディドロの虚構がブーガンヴィルの提示する歴史・民族誌的な事実ないし証言をふまえて構想されていると仮定した場合の推論である。遺憾ながらこの仮定は必ずしも必要ではない。というのは先のオルーによる男子の「職業」の列挙——生産にたずさわるのはそこに農夫と漁夫と猟師しかいない——からは想像できないことだが、タヒティでは鎖が使われてきたことをオルー自身が語っているのである。男子が適齢期にいたるまで腰にまくという「細い鎖」(p. 611)である。ということは、ディドロのタヒティ人たちはそれを製造してきたということを意味する。兵士の存在をはじめとして「海外」との敵対関係はしばしば暗示されるものの——この点では作者はブーガンヴィル (pp. 255—256)に依っている——、交易はまったく話題になっていないからである。ちなみにこの鎖の観念も、生殖をさまたげる身体の状態のあり方に応じて女性に義務づけられる白、黒あるいは灰色のヴェール (pp. 611, 619)のそれとともに、放埒ないし自由の制御、少なくとも拘束の機能をもつ限りにおいて、老人の語る捕虜の鎖に通底するイメージではないだろうか。

ともあれしかし、さらに重大なのは鉄の生産という途方もない断定である。さらにオルーは鉄と金を事も無げに比較している (p. 625)。人類の発展＝失墜のプロセスにおいて決定的な段階となる冶金の発明は、しかしすこぶる困難であったとするルソーの有名な議論²⁰⁾を対置する必要はあるまい。鎖の導入が恣意的な思いつきであって、物語を組織する他の要因と整合しないことを指摘すれば十分である。じっさい、Bによって「人類の起源に接する」(p. 587)と、同じくAによって「文明化されていない」(p. 628)とされる文明の段階で、タヒティにはすでにまさに「鉄工業」が成立しているというのである。金はもちろんのこと鎖は、犁(鋤)や銛のように農・漁業の生産活動において直接に役立つ品物ではないことを忘れまい。そしてこの齟齬もまたA、B/オルーの間で起こっていることを指摘しておく。

もう一つの疑問についても、老人の発言は権威たる著者 (auctor) によって正当化されはするものの、いささか期待外れの解決をみせる。タヒティ人たち

は短剣の類の存在を知った。(おそらくまずイギリス人たちが、次いで) フランス人たちが所持していたからである。更にタヒティ人との物々交換を思い出しながら «couteaux» (ナイフ、短刀) は彼らにおいて、「決定的な成功を見た」とブーガンヴィルはノートしている²⁷⁾。しかしそのことから一挙に、短剣(ないし短刀)を用いた「喉笛の切断」による殺人方法の知識を老人が考え得たとは言えまい。じっさい、作者はこの知識をもまた虚構によって彼に与えるのである。老人は、女の獲得を争うフランス人たちがそのやり方で殺し合った、という。ブーガンヴィルにむかって、

わしらの女たちは、と長老は言う、お前の腕のなかで狂った。お前は女たちの腕のなかで獯猛になった。女たちは互いに憎み合いはじめた。お前たちは女たちのために喉を切り合った(vous vous êtes égorgés) (II, p. 590)

老人の知識はこの模範的な虚構の事件に由来するのである。

他方しかし確かなこともある。そしてそれをオルーの今の指摘も確認するのだが、これがかつて極めて西歐的あるいはフランス的な殺人の手段であったという事情である。ローマでは «poignarder» (短刀で刺すこと) が復讐の手段であったように、「égorgé」は死刑の方法であったことを、ディドロ自身も示唆している²⁸⁾。他方ローマの勢力下にあったユダヤでも囚人に鎖が用いられたことは『使徒行伝』第12章で明らかである。そのため «égorgé」は刑死の運命の暴力的な比喩として、あたかも鎖が捕囚のイマージュであるように、かなり常套的な表現となっていたという事実である。マルローは捕虜の身にある人物の想念として、これら二つのイマージュが同時に用いられたパスカルの断片の一つを思い出させている²⁹⁾。すなわち、

死刑の判決を受けて鎖(châînes)につながれた多くの人々を想像してほしい。その中の何人かは、毎日他の人々の前で喉を切られてゆく(égorgés)。残った者たちは、仲間の状況のうちに自分自身のそれを見出し、苦痛のなかで希望もなく互いに見つめ合いつつ、自分の番をまっている³⁰⁾。

そして常套的な比喩はまた、当然のようにパロディの対象ともなった³¹⁾。

文化的な限定を考慮せずしてタヒティに鉄の生産を導入したように、同じよ

うにディドロは、西洋人にとっての常套語をいささか不用意に未開人に貸し与えかねないことを指摘して、脱線を閉じることにしよう。というのもセネカ論の作者は、白人を難破から救助したイロコイ人にこう言わせているのである。

先ほどはお前たちは不運な人々だった。で我われはお前たちを救った。明日はお前たちは我われの敵となる。我われはお前たちの喉をかき切るぞ (nous vous égorgeons)³²⁾。

お分かりのとおり、このインディアンはおそろしく西欧人的なのである。

似たケースとして、上記例文中の「その男」(celui-ci)、そしてそれに応える「あの男」(celui-là)を指摘しておこう。ブーガンヴィルの報告とは違って、ディドロの構想するタヒティに宗教はない。「あなたが宗教とよんでいるのが何なのか私は知らない」とオルー(Ⅲ, p. 600)。従って祭司はいない³³⁾。ゆえに、十字架を名指すことができなかつたように、キリスト教の用語の転用としての«prêtre»や«aumônier»その他の類義語は使えない。ゆえにこれを「指呼詞」(dédicatif)に訴えて指示する。そしてそれとの対応を形成するために、老人は後者を「兵士」とは呼ばなかつた。幸いなことに、それによっていささかの侮蔑のニュアンスも入ってくる。いわば類で種をあらわすことでより多くの外延に適応できるという意味では、指呼詞の利用は一種の提喩に近い技法といえるのではないだろうか。

さて「鉄」に関する考証を終えて、老人の言葉のうちでまず目立つ手法から挙げていこう。

(2) フィギール

頓呼法 (Apostrophe)

まっさきに指摘しなければならないのは、言説ないし思惟の文彩のうち、デュマルセが「そこに居る人もしくは居ない人に突然言葉をかける」(VPG., 622) 話し方と説明している「頓呼法」である。つまり聞き手(読み手)への話しかけとか呼びかけである。例をあげる。

1) 泣け、不仕合わせなタヒティ人たちよ、泣け。(第1行)

純然たる呼びかけおよび命令法³⁴⁾による頓呼によって、弁士はその場にいると

假定されるタヒティ人たちに直接に働きかける。無論これは読み手における臨場感の印象を利用する手法である。なお例文にはもう一つの範疇に分類することのできる「反復」が重なっている。これは後に取り上げる。演説の現場への参照を行うと同時に未来を予告する呼びかけないし名指しもある。すでに見たばかりの文章だが、

2) Un jour ils reviendront le morceau de bois que *vous voyez* attaché à la ceinture de *celui-ci* dans une main, et le fer qui pend au côté de *celui-la* dans l'autre, *vous enchaîner, vous égorger* ou *vous assujettir* à leurs extravagances et à leurs vices. (3-6. 斜字体筆者) (いつの日か奴らはまたやってくる。片手には木切れをもち——ほらその男が腰帯にぶら下げている木切れだ——もう一方の手には、あの男が脇に吊るした鉄をもつてもどってくる。お前たちを鎖につなぎ、喉笛をかき切り、もしくは自分らの途方もない振舞いや悪徳に従わせるために)。

ここで訳出していない最初の «vous» は演説の現場への参照であり、後の「お前たち」では、不吉な将来が喚起されている。そして指呼詞は、頓呼が前提としている「言説の状況」、つまり「わし」—「お前たち」の対面と相関する。なおここにも同時に、後に取り上げることになる別種の技法すなわち対照語法が用いられている。

3) おお、オタイティ人たちよ、我が友達よ、お前たちには不吉な将来をまめがれる一つの手立てはある。だがわしは、お前たちにそれを勧めくらしいなら死んだ方がましだ。(9-11)

これまた注目すべき件である。というのもここにも言いたいことを言わずに分からせる言い方が重なっているからである。これまた後に取り上げる必要がある。

この11行の文章には、頓呼法は際立って多い。他にも二つある。

4) いつの日かお前たちには奴らのことがもっとよく分かるだろう。(2-3)

5) いつの目か、お前たちは奴らに仕えることになるだろう。奴らと同じように腐りはて、さもしく、惨めになって。(6-7)

もちろんいずれも聞き手たちの未来に関する予言である。

これで頓呼法の列挙を終わる。

希求語法 (Optatio)

次に、デュマルセがラテン語を用いて名ざしている「希求語法」をあげる。

これは文字どおり「念願」(VPG, 623)を表明する。例は二つ。まず段落を開く文章である。

1) pleurez, mais *que ce soit de l'arrivée et non du départ* de ces hommes ambitieux et méchants. (1-2) (泣け、だがそれはこれらの野望をもつ邪な男たちが出てゆくからではなく、遣ってきたから、であれ)

ここではそれは、典型的な *que* のみちびく接続法の節によって表現されている。なお「～であって～ではない」という言い回しについては後で触れることにする。希求語法は、段落の終わりの文章を飾ってもいる。

2) 奴らは島を離れるがよい、生きてゆくがよい。(11)

命令語法はいうまでもない。希求語法は、頓呼とともに高揚した感情の表現に適している。A が用いた語を繰り返せば、「激越な」とか「険しい」とかそしてまた恐らく問題のいわゆる「野性的な」調子を醸し出すのに適した要素であろう。

次に、「反復」の概念で統括することのできる一連の言語操作を観察しよう³⁵⁾。それは、2単位の反復と3単位の反復とに区別される。まず前者からとりあげる。

二単位の反復 (*Répétition binaire*)

もっとも分かりやすい現象である語彙のレベルにおける反復から考察していく。

類義語法 (*Synonymie*)

語句を二つ重ねて用いるのである。デュマルセも反復の一種としてこれを挙げ、「類義語法は、ほぼ同様の意味作用をもつ数語を集めることである」と書いている (VPG, 619)。ただし、意味上の類似性や共通性の他に、それらの語が文章のなかで文法的に同一もしくは同様の機能を果たすことが条件になる。まずこの部類の特殊なケースとして「同語反復」がある。

1) 泣け、不仕合わせなタヒティ人たちよ、泣け。(第1行)

この種の単純で機械的な反復は、希求語法の場合に似て、話者の感情の豊かさよりはむしろその強さや激しさ、エネルギーを強調する。乱用すれば単調、いわゆる一本調子に陥りかねない。

次に端的な意味での類義語法をとりあげる。

2) これら野望をもつ邪な男たち。(2)

二つの形容詞のうち、一方 « ambitieux » は政治的な意味——支配や占有をもくろむ——で、他方 « méchants » は道徳的な意味をもつが、いずれもタヒティの民を害するという否定的な価値をしめすことに変わりはなく、それゆえ類義語法と見なし得るのである。文法的な機能も同じである。これら二点は次の例においても明らかな特徴となる。

3) 奴らはまたもどってくる (...)、お前たちを自分らの途方もない振舞いや悪徳に従わせるために。(3-5, 6)

ところで例文2)と3)においては、いずれも二つの語句が等位接続詞 « et » によって連結されていることに注意しよう。この品詞の名称はまさに同じ機能の語の接続が問題であることを意味する。これは端的に「二なるもの」として実現される反復現象をそれとして認定する手がかりになる。

平行語法 (Parallélisme)

さて、今までに見た事例は、繰り返される語の品詞は様々であるにせよ、すべて語彙のレベルにおける反復であった。ところが等位接続詞は語より大きな単位についても連結辞として用いられる。そしてそれらの単位である連辞 (syntagme) と連辞との、節と節との、さらには文と文との反復が行われるのである。それは、ヤコブソンが頻繁にもちいた語を借りて「平行語法」(parallélisme) と呼ぶことができる³⁰⁾。

まず単純なものから取り上げれば、すでに「希求語法」の項であげたテキスト最後の文章はその一例である。すなわち、

1) Qu'ils s'éloignent et qu'ils vivent (11) (奴らは島を離れるがよい、生きてゆくがよい)

お分かりのように、二つの祈願文が等位接続詞によって結合された事例である。

はるかに規模の大きい次の例においては、二つの節は同じ文法上の機能を有しながらも、意味論的にはそこに、単なる併置とか平行関係とかではなく、対立ではないにせよ、少なくとも一種の対比ないし対照が認められる。純粋な併置から次に取り上げる文彩への移行をしめす中間的な形である。問題の例文を対比が視覚的にきわだつように描けば、次のようになる。

2) 片手には、ほらその男が腰帯にぶら下げている木切れをもち、

le morceau de bois que vous voyez attaché à la ceinture de celui-ci dans une main,
et le fer qui pend au côté de celui-là dans l'autre

もう一方の手には、あの男が脇に吊るした鉄をもって。

二つの名詞連辞のあいだには定冠詞、関係代名詞、指示代名詞が、さらに前置詞も対応し合っている。要するに構文上で組織的な並行関係が見られるのである。厳密には十字架と剣とは意味が対立する (*opposés*) とは言い難い。異なる (*différents*) とかせいぜい対照的 (*contrastés*) なら語れるであろうが。無論、二つとも攻撃手段のパラディグム—武力と宗教—である限りにおいては同列にある。

対照語法 (*Antithèse*. 対句)

中国の詩とか日本の古典文学でお馴染みの文彩で、対句とか対照語法とか呼ばれる。デュマルセは「対照語法は、これを形成するところの語が互いに対立する意味作用を有する点において、他の話し方と区別される」(VPG., 621)、と説明している。テキストのふくむ件においては、二項は対立どころか反対の関係においてあり、その一方のみを選ぶことが要請される。すなわち、

「これらの男たちが出てゆくからではない、やってきたことを〔泣くべきなのだ〕」。(1-2)

この文がある事柄 (*arrivée*: 到来) を言い、同時にその反対 (*départ*: 出発) を否定しつつ言う一種の反復を実現していることにお気づきであろうか。この種の言い回しについては、デュマルセよりはるかに昔の文人を参照する。ダンテの師であったというブルネット・ラティーニ (v. 1220—1294) が、その修辭学論の中でまさにこれについて語っているからである。彼によれば、彩り (*couleurs*) をあたえつつ言説をふくらませる手法には8通りあるという³⁷⁾。その中には例えば直喩や隠喩なども入っているのだが、また別のものである。ブルネットは、「第八の彩りは反復 (*répétition*) とよばれる。というのは話し手は自分の話を繰り返して同時に二回言うからである。それには二通りある」(p. 135) と、書いている。

ここではその一方が問題である。

一つは、とブルネットは言う。事柄を云い、すぐにその反対によってこれを再び言うのである。どのようにか。私はある人について彼は若いと言いたい。私は言葉を次のように繰り返す。彼は若い、老いてはいない、と。あるいは、これは甘い、苦くない、と。(Ibid.)

18世紀フランスの一つのテキストにおいて、もしかしたら野性の民の雄弁を証拠だてるかもしれない言い回しの一つを、実は西欧の修辞学はすでに13世紀末には、言説を同時に美化しかつ増幅させもする——それによってよく分からせ納得させることもあろう——手法として、注目し、拾いあげ、記録し、したがって意識的に教えてもいたのである。

だがそれだけではない。同じ現象に20世紀の初め、ロシア・フォルマリストの重要な一員であったヴィクトル・シクロフスキーがまた、その著書『散文の理論』（1925年）のなかで言及しているのである。言語芸術におけるいわゆる「段階的構成と主題展開の引き延ばし」について論じながら、著者は段階的構成にかかわるのはとりわけ……「反復」である、とする。そしてその様々の具体的な在り方を列挙したあと³⁸⁾、奇妙なことに、我々が中世末期にトスカーナ人によって記録されたことを知ったあの現象を、ペテルブルグの理論家もまた、その意義にかんして否定的な評価を下しつつ取り上げるのである。曰く、

ときによると反復は、ひじょうに残念なことに、そう、少なからず残念な気持ちにされたのだが、まっすぐな道でまわり道ではない(...)とか、独身で結婚していないとかいうように、反対概念の否定を通じて示される場合がある。(p. 58)

著者は心ならずも諧謔を楽しんでいるのであろうか。まず「非常に残念」といい、次にこれを反対概念の否定によって言い換えて「少なからず残念」と言うとき、彼自身のこの反復も残念ではないだろうか。評価はともかくとして、我々にとって意味があるのは、問題の言い方が一つの技巧として、西洋の（あえて云えば）文明諸国において古来用いられていることの確認が、20世紀初めのロシアでもなされたという事実である。

以上は2単位を基本とした反復の文彩である。次には3を基本とした反復の様態を調べなければならない。

三単位の反復 (*Répétition ternaire*)

例は二つ三つある。

Un jour vous les connaîtrez mieux. Un jour ils reviendront... vous enchaîner, vous égorger ou vous assujettir... Un jour vous servirez sous eux, aussi corrompus, aussi vils, aussi malheureux qu'eux. (2-3, 5, 6-7)

まず表層から指摘すれば、「un jour」（いつの日か）が繰り返して先導する三つの文章はいずれも未来時制で、いずれもタヒティの民の不吉な将来を予告している。若干のコメントが必要である。

まず、第一文に無くて第二文から入ってくる要因がある。それは西洋のもたらそうとする悪の要因——捕捉（拘束）、殺戮、そして服従させることもしくは洗脳——である。そして第三文はその結果としての民全体の奴隷状態を预言する。こうして三つの単位の反復は、自由な民の隷属へと向かうプロセスを辿っていると見ることができる。デュマルセは思惟ないし言説の文彩の一つとして「漸層法」（Gradation）というのを紹介している。それは、「階段を伝うように、常に程度を増していく思惟から思惟をたどって上昇してゆく」³⁹⁾。この文彩が類義語法に対して反復という共通性を有しながらも、独自の種差（段階的上昇）をしめすことは明らかであろう。

次に、もう一つの点とは、この件が第二文および第三文の内部にそれぞれ一つずつ別の三単位の反復を見せていることである。すなわち

（第二文）お前たちを鎖につなぎ、喉笛をかき切り、もしくは自分らの途方もない振舞いや悪徳に従わせるために）(5-6)

もう一つの等位接続詞「ou」がしめすように、拘束されるか、殺されるか、あるいは隷従の身となるか、少なくとも一つは避けられないところの三つのパラディグムの列挙である。そして最後に、

（第三文）奴らと同じように墮落し、さもしく惨めになって）(6-7)

第二文が事件や行為のレベルの不幸——動詞で表現される——であったのに対して、第三文は不幸な状態——形容詞で表現される——の予告である。すなわち奴隷状態の。そしてここではタヒティの民全体の運命が問題であると理解することができる。三つの形容詞は、いずれも民が同時に免れ得ない有り方を意味していて、いずれも道徳上の言葉で与えられている。「墮落」（あるいは腐敗）、「さもしさ」そして「惨めさ」である。そしてこれが幸せの島を汚染しようとしている西洋（フランス）の現状である、と老人は言うのである。以上で三元反復の観察を終わる。

テキストの研究としては枚挙することも必要なので、残っている技法の内か

ら最も重要なものにかぎって、一つ二つ注意を喚起しておきたい。

暗示的看過法 (*Prétérition, Prétermission*)

暗示的看過法については、デュマルセは、よく似た、しかしある細部によって異なると考えられる黙説法 (*Réticence*) しか挙げていない。曰く、

黙説法とは思惟を言わずにおくことに存する。あからさまに語るよりは沈黙することによってそれをもっとよく知らしめるのである。(VPG, 623)

しかし、単に黙るのではなく、テキストの例が示しているように「私は黙る」とわざわざ云うことが肝心なのではないだろうか。それがデュマルセの「黙説法」には欠けている。同じ事典の項目 «*Prétérition*» はこの点を教えている。すなわち、

ある事柄について、語らない、知らない、あるいは少なくとも強調はしたくないといいつつ、それを語る文彩であり (...)。キケロにしばしば例をみる⁴⁰⁾。

そしてもう一つ、これに似た «*Prétermission*» に関する同じAなる署名を付された記事は「それによって、もっともつよく教えこみたい事柄に軽くふれる (*passer légèrement sur*) ふりをする文彩」(*Ibid.*, p. 338) と説明し、デモステネスの例を上げている。

互いに微妙な差異をもつこれら二三の文彩のいずれに属すると判定するにせよ、例は無論タヒティ人への言葉の最後に、頓呼によって導かれた発言である。

お前たちには不吉な将来をまぬがれる一つの手立てはある。だがそれを勧めるくらいなら、わしはいつそ死んだ方がましだ。(10-11)

老人の勧めたくないと言っているのが何なのかお分かりであろうか。もしそうならこの沈黙の声は聞き届けられたのである。そして西洋修辞学がコード化したこの手法は、それを殊更に学んだ人にも、老人が前にしているそうでないタヒティ人たちにも理解できるとすれば、もしかしたら西洋という枠を溢れでる一種の普遍性をもつ、と推断することもできる。したがってまたおそらく

「野性の雄弁」にも通じる、と..... もちろん、演説に立ち会っているフランス人一行にその暗示が分からない筈はない。そのことは微妙な状況を作りだしたはずである。だがテキストは彼らの反応を語ることはない。

我々も、演説の構文や意味にかかわる手法の研究をこれで打ち切ることにはしたい。というのももう一つ別の分野が残っているからである。それは音に関わる現象、つまり文章の律動（リズム）や調子に属する技法の問題で、外国文学研究が直面するある意味で最も厄介な側面である。

韻律法 (*Prosodie*)

読むということが、一人で、陰気に、声を立てずに、ただ文字を目でたどることになってしまった時代や国に生きる人々には忘れられがちなことだが、韻律は、本来的に口頭の演説として、そのための準備もしくは逆にその記録として作られる文章においては、黙読を前提として書かれるテキストの場合よりおそらくもっと重要である。

さて、日本の古典的な韻文が奇数音節とりわけ5および7を偏愛することは周知のとおりだが、問題の演説文には、音連鎖を同時に分節する意味論的単位および連辞単位に対応して偶数音節がしばしば現れ、こうしてフランスの古典的な韻文ないし擬似韻文の断片がいくつも見出される。顕著なものにかぎって挙げれば、(テキストの下に音綴の数をしめす)

1) vous enchaîner, vous égorg₄er ou vous assujettir à leurs extravagances₆
et à leurs vices. (5-6)₄

これが偶数を基調にしていることは明らかである。2種類の詩句が姿を見せつつある。8音綴詩句(octosyllabes)とその半句、そして12音綴詩句(alexandrins)である。後者はここでまさに古典的に6音綴の半句(hémistiche)二つで形成されている。ただし、12音綴の雄弁調に入りかかったところで直ちに4音綴の断片がくることによって、それは崩れる。

2) Qu'ils s'éloignent et qu'ils vivent. (11)
₃ ₃

3 / 3 と切れる完璧な6音綴の無韻詩(vers blancs)である。最後に次の文を観察しよう。

3) Mais je me console, je touche à la fin de ma carrière, et la calamité
que je vous annonce, je ne la verrai point. (7-9)

10音綴詩句 (décasyllabes) ないしアレクサンドラン、あるいはそれらの半句のみでこの文は書かれている。そして全体はほぼ同じ量の音節の単位に区切られ、滑らかである。これは「総合文の構成要素がほぼ等しい音節数をもつ」と説明される « Isocolon » (VPG., 621) の一種とみなすこともできるだろう。そして5-10-11-6という具合に、左右の均衡を按配することによって調和を備えた文となっている。開始し、上昇し、しばし維持し、それから下降するのである。この構造は、後半部においてまず目的補語を名詞であたえ、ついでそれを代名詞でうける一種の冗長構文によって実現されている。そして冗長が強調に通じることは言うまでもない。

ディドロは一生の間に、『百科全書』の記事や個人書簡をふくめて膨大な量の文章を生産している。ところでそれは全て散文である。ヴォルテールやルソーとはちがって韻文の作品を試みることはなかった。韻文の有する社交的上品さとか尊厳、「詩」と同義となるほどの芸術性ないし技術性が自明の理であった時代であって、これは徹底した散文作家であった。ところが、根っからの散文作家の書いた文章に、フランスの古典的な韻文の技術的な要素、文内部の連辞における音綴の量、そしてそれらの関係——それによって対応や均衡が形成される——が紛うことなく発見されるのである。もちろん韻文を思わせる、もしくは詩的なものが根強く再発見されるからといって、それゆえにテキストが良質の散文であるというわけではない。ただ朗誦や朗読、あるいは口述という観点からすれば、音楽に近いという意味で最も美しく演じられるのが韻文であってみれば、口頭の演説において散文が韻文を模倣するとしても、それは避けがたいことなのであろう。

結論

我々が最初に指摘した転義、すなわち提喩 (木切れ、鉄) は、人々 (フランス人、西洋人、文明人) にとってありふれた語 (十字架、剣) ではないという理由で、もちろんそれに対する反応は読み手の属する文化、あるいは傾向や素養の違いにしたがって様々であるとはいえ、一瞬考えざるを得ず、ある種の印象を与えずにはおかない。そして人々は、ああ十字架は、見方によっては木切れに過ぎないのだ、ということに今更のように思っていたかもしれない。ある

いは逆に木でできているからこそ十字架は十字架たりうるのだという瞑想に陥るかもしれない。こうして、当たり前で分かりきっていることについて、当たり前でない、斬新で鮮烈な再認識を得るかもしれない。シクロフスキーが『散文の理論』のなかで提案した非日常化ないし異化効果⁴¹⁾の事例である。

また、文中で二度にわたって発せられるオタイシヤン (Otaïtiens) なる語は、フランス語では馴染みのない音の語であるからして⁴²⁾、ある種の違和感を醸し出すことは事実である。ほとんど同じ問題を、デュマルセどころか、その2000年以上も前に『詩学』のアリストテレスは論じていた。曰く、

文体（語法）に威厳をあたえて平俗さから抜け出すためには、耳なれぬ語をつかうのがよい。耳なれぬ語とわたしが云うのは、稀語、転用語（比喩）（…）である⁴³⁾。

そして「〔稀語〕とはよその人しか使わない語のことである」（1457 b 3）、と詩学者は云う。もちろん「Otaïtiens」は異民族の用いる語ではなく、異民族を名指す語であるが、元はといえば現地から輸入された語である。そのことはブーガンヴィルも指摘して、神話の、それもウェヌスゆかりの「新キュテラ (Nouvelle Cythère) なる名称が与えられていた島は、その住民たちからはタイティ (Taiti) という名前を受けとっている」（p. 247）と書いているのである。無論「耳なれない」語であり、まさに「稀語」(grôtta) である。これは後に「エグゾティスム」と呼ばれることになる効果に似ている。じっさい、ロジェ・マテはエグゾティスムの手法として、真先に「その響きだけで雰囲気醸し出す語の力」、「新奇な (insolites) 音節」をあげているのである⁴⁴⁾。

我々が検討した文章はたかだか10行余りのごく短いテキストにすぎない。だがそこには、書き手やとりわけ読み手が一々意識するか否かは別にして——しかし西欧の修辞学はこれを明確に意識していた——、言語の使用法、作文法にかかわるすこぶる多くの工夫や技巧が、それも同じ箇所にくくつも重なって介在していることが分かる。それにフランスの古典的な作詩法の痕跡が。

結論しよう。我々が読んだ文章は「野性の雄弁」の一例であると言えるかもしれない。しかしそれを言うためには、野性の雄弁とはどういうものかを知っておく必要がある。そもそも「野性」とは何なのか。なにか普遍的にそう呼べるものはあるのか。それとも野性にもいろいろあって、その雄弁とやらにも様々なものがあるのか。タヒティに特有の、ヒューロン人に特有の、太古の大和民

族に特有の、ヘブライ人に特有の…… だがこのような問いは自家撞着であろう。民族性とはまた文化であり、したがってそれを同時に「野性」と呼べる筈はない。ともかく、少なくとも判断の基準となるものを示すことが必要であった。我々としては断言して憚らない。老人の言葉は、西欧の伝統が「レトリック」の名において集大成してきた演説および文章法にかかわる学知を踏まえ、あるいは（言うも愚かな自明の理だが）それを使いこなす人によって書かれた、その意味では優れて西欧的な文章に他ならない、と。更に言語を通してかま見たディドロの構想になるタヒティの文明も、時としては居心地悪いほどフランス的である、という認識を得た。その意味では『補遺』は、18世紀フランスに現れる異文化に取材した多くの作品群の典型的な一例である。それは観念的に把握し場合によっては恣意的に歪めた異文化を戦略的に利用する。

最後に筆者につきまとうひとつの疑問を記してこの試論を閉じる。フランス王国によるタヒティ植民地化の企てを攻撃するために、タヒティ人の雄弁と称して実は西洋古来の修辞を展開する。目的は手段を選ばない。他方またおそらく（というのもこの問題を我われは検討しなかったからだが）⁴⁵⁾、男（オルーなら「雄」という）の性欲の開放を原理とし、雌は快樂と生殖の道具となる——それ以外に仕事はない——システムをタヒティ社会の名において空想する。目的は対象を再現しつつも歪曲してはばからない。それは西洋におけるタヒティ神話（fable）⁴⁶⁾に同調し、さらにこれを増幅し、永續させることではなかったか。こうして、タヒティ民族の擁護という大義名分のもとに、ディドロが言語文化についても倫理についても虚構にすぎないイマージュに与する時、この民は真に擁護されていたと言えるのであろうか。

注 釈

1) Louis-Antoine de Bougainville, *Voyage autour du monde, par la frégate du Roi La Boudeuse et la flûte l'Étoile* (1771), Éd. présentée, établie et annotée par Jacques Proust, Coll. « Folio », Gallimard, 1982, p. 33. ただし著者は、フランス人である私人による世界周航には先例があることを認めている (p. 40)。なおこの作品には、10枚あまりの版画の複製つきで、ディドロの『補遺』と合本にした版 (Rombaldi, 1970) もあるが、初版を復元するプルースト版に対して章や部の構成、メタテキストに異同がある。

2) Cf. P. Vernière, « Introduction » au *Supplément au Voyage de Bougainville ou Dialogue entre A. et B.*, in *Œuvres philosophiques* (sigle O. P.), Garnier Frères, 1964, pp. 447-448.

3) Bougainville, *op. cit.*, pp. 46-47. 強調筆者。ここにルソー批判のみを見ることはできない。また「軽薄」で、かつろくに知らないことを「決定し」たがるパリ人士の「不毛の好奇心」の

批判 (pp. 263-264) 参照。

4) Diderot, *Supplément au Voyage de Bougainville ou Dialogue entre A et B sur l'inconvénient d'attacher des idées morales à certaines actions physiques qui n'en comportent pas*, in *Œuvres Complètes* (sigle O. C.), t. XII, Hermann, 1989, pp. 577-644 ; O. P., pp. 455-516.

5) Diderot, « Voyage autour du monde », O. C., t. XII, pp. 509-519. なお筆者のこの段落は三部作の構想の指摘とともに「モンペリエ18世紀研究センター」による紹介文(« Introduction » aux *Trois contes*, O. C., pp. 499-504) に負う。

6) Cf. Julia Kristeva, *Sēmeiōtikē : Recherches pour une sémanalyse*, Seuil, 1969. なお拙論「テキスト間関係性をめぐる覚書」、山口大学「独仏文学」第4号(1982年)、21-37頁参照。

7) 中川久定氏は、これら二つの作品の主題と外示の意味とを綿密に比較し、両著者の立場と思想の差異を明らかにしている。『補遺』テキストにおける「自然」概念の二義性の指摘は注目すべきであるが、異なる概念の主張と発言者の複数性とのかわりの問題は不問に付されている。「史実からユートピアへ——ブーガンヴィル『世界周航記』とディドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』——」(1968-1969)、『啓蒙の世紀の光のもとで』所収、岩波書店、1994年、pp. 131-212参照。

8) Bourlet de Vauxcelles éd., *Opuscules philosophiques et littéraires*, 1796において。

9) O. C., pp. 614-616. 裁判をうける未婚の母ポーリー・ベイカーの演説。この箇所については全集版の注および« Appendice » (p. 645) 参照。

10) Le Centre d'étude du XVIIIe siècle de Montpellier, « Introduction », O. C., p. 499.

11) ヴェルニエール版『哲学著作集』(O. P.) の処理は雄弁である。また暗黙には『補遺』を *Pensées philosophiques* や『盲人書簡』と抱き合わせにしたアダマン版 (Garnier-Flammarion, 1972) も証拠となる。

12) Tz. Todorov, *Nous et les autres : la réflexion française sur la diversité humaine*, Seuil, 1989, p. 31.

13) そのことをベンレカッサはこう表現している。「この虚構の働きが隠していること、それは幾通りもの言説——その交差点にテキストは位置している——を調整するのは困難であるという事実である。それゆえ我われには、作品は唯一の意味に還元され得ないと思われる」(G. Benrekassa, « Dit et non dit idéologique : à propos du *Supplément au voyage de Bougainville* », *Dix-Huitième Siècle*, No 5, 1973, p. 38)。

14) 上記ヴェルニエールやアダマンの解説、中川氏の論考の他に、トドロフ(上掲書、31-49頁。批判の鋭さで興味深い)、ベンレカッサ(上掲論文、29-40頁。方法論的考察で重要)、M. Duchet, *Anthropologie et Histoire au siècle des lumières : Buffon, Voltaire, Rousseau, Helvétius, Diderot* (1971), Flammarion, 1977, pp. 345-395参照。

15) ブーガンヴィルをむかえた首長の家にヨーロッパ人との接触をこぼむ一人の「高貴な老人」がいた (Bougainville, *op. cit.*, pp. 229-230)。それがディドロの虚構の「出発点」となることをシナールが指摘したという (G. Chinard, Ed. du *Supplément*, Paris : Droz, 1935, p. 117. Voir O. P., p. 465, n. 1)。ただしブーガンヴィルはこれを首長 (Bやマイスターはそう解釈した) とではなく、「首長の父親」と明記している。

16) 全集版の脚注 : « G. Chinard (o. c., p. 128, n. 1) cite ici l'Éloge de Diderot par Meister, que ce morceau enthousiasmait : Le discours du chef des Otatiens dans le *Supplément...* » (O. C., p. 595-596, n. 31)。マイスターの著書名は正しくは *Aux mânes de Diderot* かと思われる (O. P., p.

472, n. 1参照)。Éloge...なる書名はシオラネスキュに見えない。残念ながら筆者はシナールの版をみることはできなかった。

17) O. P., p. 472, n. 1 ; O. C., p. 589, n. 22.

18) G. Benrekassa, *art. cité*, p. 36.

19) Dumarsais, *Art. « Figure », l'Encyclopédie*, t. VI, 1756, 766 b-772 b. 参照の便宜のためここでは Du Marsais, *Les véritables principes de la grammaire et autres textes*, Coll. « C.O.P.L.F. », A. Fayard, 1987, pp. 605-626を使用する。(VPGと略記)。なおこの記事については拙論『フィギュール』について(1)九州大学文学部「文学研究」第95輯、1998年、pp. 121-145, (2)同第96輯、1999年、pp. 83-106, (3)山口大学「独仏文学」第25号、2003年、pp. 1-22参照。

20) Diderot, *Essai sur les règnes de Claude et de Néron* (1782), O. C. de Diderot, t. XXV, Hermann, 1986, p. 228.

21) Diderot, « Voyage autour du monde », O. C., p. 517.

22) Dumarsais, *Des tropes ou des différents sens*, éd. F. Douay-Soubelin, Flammarion, 1988, p. 120. ちなみに、ボゼ (N. Beauzée, 1717-1789) の起草になる項目 « Synecdoque », *l'Encyclopédie*, t. XV (1765), 753 a は、デュマルセのこの教行をそのまま復元している。なお鉄 (= 短剣) の用例はアウグスティヌスに見出されることを報告しておく。すなわち「二つの悪しき意志を仮定してみよう。例えば毒 (venino) と短剣 (ferro) のいずれで殺害しようかと思案する人の場合 (...) である」(Augustin, *Les confessions*, L. VIII, x, 24, Les Belles Lettres, 1961, t. I, p. 196)。また毒と鉄 (短剣) の並置の例はローマ史をあつかうディドロの文にも見える (*Essai sur les règnes de Claude et de Néron*, *op. cit.*, pp. 135, 144, 168...)。この二つは少なくとも古代ローマ以来の特権的な暗殺の手段であることが分かる。

23) Bougainville, *op. cit.*, p. 250.

24) ディドロの盲人は、一種の類比にもとづいて、視覚の対象を触覚にとって固有の意味をもつ語で表現する。「サウンダースンは皮膚によって見ていた」(*La Lettre sur les aveugles à l'usage de ceux qui voient* (1749), *Œuvres Complètes*, t. IV, Hermann, 1978, p. 47)。他方メラニー・ド・サリニヤツクは「歌われるのを聞くととき、褐色の声とブロンドの声とを識別していた」(*Addition à la Lettre sur les Aveugles* (1782), O. C., t. IV, *op. cit.*, p. 99)。すなわち起源的な比喩 (ここでは隠喩) の産出である。この隠喩をあたかも事物化したのが、『聾啞者に関する書簡』(1751) その他で話題になるカステル神父の「目に見せるクラヴサン」である。

25) Diderot, *Supplément...*, III, O. C., p. 609. この発言における祭司の不在そして女性に関する沈黙に注目すべきである。いずれも無邪気な失念ではない。

26) Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les hommes*, *Œuvres Complètes*, t. III, La Pléiade, Gallimard, 1964, pp. 171-173.

27) 別の小島に関する記述の一部 (Bougainville, *op. cit.*, II, ch. 4, p. 278)。

28) Diderot, *Essai sur les règnes de Claude et de Néron*, *op. cit.*, p. 317.

29) Malraux, *Les noyers de l'Altenburg*, Gallimard, 1948, p. 289.

30) Pascal, *Les Pensées*, 434 (éd. Lafuma)-686 (éd. Sellier)。

31) 自分のかつての結婚式を想起するというヴィヤンの一登場人物：« Puis, le lunch, chez les beaux-parents. (...) On s'est gorgés. Il prononce: On s'égorgeait. » (B. Vian, *Les bâtisseurs d'empire, ou le Schmirz*, 4e éd., L'Arche, 1959, p. 55)。

32) Diderot, *Essai sur les règnes de Claude et de Néron*, *op. cit.*, p. 344.

- 33) とはいえ、未開社会における祭司の存在をAとBは認めている (O. C., p. 583)。一般に未開社会のことを語る兩人と、他方無宗教のタヒティ社会を語るオルーや老人の間には一貫性が欠けている。タヒティがあるべきであろう社会、例外的なユートピアの性格をもつということであろうか。
- 34) «tour impératif» を語る A. Pellissier, *Principes de rhétorique française*, onzième mille, Hachette et Cie, 1889, pp. 153-154参照。
- 35) Cf. VPG., pp. 619-621.
- 36) Cf. Jakobson, «La nouvelle poésie russe» (1921), «Le parallélisme grammatical et ses aspects russes» (1966), in *Questions de poétique*, Seuil, 1973.
- 37) B. Latini, fragments d'un traité de rhétorique, reproduit par J. Paulhan dans les «Notes et documents» des *Fleurs de Tarbes* (1941), *Œuvres Complètes*, t. III, Cercle du Livre Précieux, 1967, pp. 133-135. ポーランは、ラティーニがそれを何語 (ラテン、トスカーナ、フランス語のいずれ) で書いたのか明らかにしていない。なおこれは20世紀における修辞学の再生にとって重要な契機となる出版であった (Ch. Perelman, *L'Empire rhétorique : rhétorique et argumentation*, Vrin, 1977, pp. 9-10参照)。
- 38) すなわち「韻の反復、同語反復、その対比、心理の対比、主題展開の停滞、叙事詩の反復、民話の儀式、変転、そのほか主題を構成する数多くの方法」(V. シクロフスキー著、水野忠夫訳『散文の理論』、せりか書房、1982年 (第2刷)、pp. 56-57)。列挙には分かりにくい事項 (停滞や変転はなぜ反復といえるのか) がある他、反復の現象と現象の所在とがないまぜになっている。
- 39) VPG., p. 623. Cf. «Climax», p. 619.
- 40) Art. «Prétérition», *L'Encyclopédie*, t. XIII (1765), p. 337. 署名はA。高等法院評定官のBoucher d'Argisの記事である。
- 41) V. Chklovski, «L'art comme procédé», in *Théorie de la littérature*, éd. T. Todorov, Seuil, 1965, pp. 82-94; V. シクロフスキー『散文の理論』、上掲書、15-34頁。
- 42) 書評において一貫して用いられる「タイシヤン」(Taitiens) とて同じ効果をもつ (« Voyage autour du monde », O. C., p. 514...). ちなみに、プルースト氏が地名については初版の綴りを尊重したというブーガンヴィルの航海記では «Taiti, Taitiens» と表記されている。「Otaïti, Otaïtiens...» は、筆者の知る限りでは、『補遺』を別にすれば先に引用したマイスターの一文において見える。またクックによるタヒティの地図上に «Otaheite» が現れている (cf. V. Segalen, *Les Immémoriaux*, Plon, 1982, pp. 8-9)。なお『補遺』とのテキスト間関係で作られた Giraudoux, *Supplément au voyage de Cook* (1935) も «Otaïti» と表記している。
- 43) アリストテレス『詩学』、第22章、1458 a 21-23。引用は世界の名著『アリストテレス』所収 (藤沢令夫訳)、1994年 (第6刷)、p. 336による。
- 44) Roger Mathé, *L'exotisme d'Homère à Le Clézio*, Bordas, 1972, pp. 24-25.
- 45) 著者の構想するユートピア体制における男性原理の暴力性は、トドロフ (上掲書) の指摘に、同じく様々な政策の弾圧的な性格は全集版の解説 (Centre d'Étude du XVIIIe siècle de Montpellier, «Introduction» aux Contes, O. C., t. XII, pp. 378-379) に見ることができる。
- 46) 「タヒティ神話」(la fable de Tahiti) については、『補遺』テキスト (p. 588) もこれに言及している。なお全集版の解説 («Introduction» aux Contes, *op. cit.*, pp. 370-372) 参照。